上野天神祭

秋は祭の季節である。上野天神祭は１０月１９日から２６日にわたって行われる、菅原道真を主神とする伊賀の国上野天神宮の祭である。

祭を観る時はまず町を観るのが私の流儀だ。

上野市は私が犬山市長をしていた当時、レベルの高い自治基本条例を制定した先進的自治体であり、一目置いていた。その後、２００５年平成の合併で隣接自治体を合併し新生「上野市」でスタートしたが、ここに至るまでには隣の名張市との合併破棄や市庁舎建設に関する住民投票や元・前市長のトラブルやら、かなりごたごたした。どうもこの町は多様性に富んだというか、起伏豊かというか、体質的に面白い町である。

伊賀忍者の里であり、俳聖松尾芭蕉生誕の地であり、築城の名人藤堂高虎の完成させた上野城の城下町であり、京都・奈良の大和文化と伊勢神宮参詣を結ぶルートであり、又名古屋と大阪のちょうど中間点でもある。それらの歴史的遺跡が町のあちこちに点在する。

だからこんなに多彩で面白い上野天神祭が残っているのかと理解した。

祭の観察に入る前に城下町の感想から述べる。城閣の天守はもともと「天主」といったように天体の中心北斗七星を背後に南に城下町を作るのが宗教的宇宙観スケールの都市計画であった。町の骨格は道と町割りで決まる。現在の上野城下町は南北に走る銀座通り、東西に走る１６３号線と３６８号線は車対応で拡幅されたが、あとの町並みはほぼ江戸時代の町割りを残している。この、道路というよりは道と言ったほうがいい響きの古い町並みを長々と多彩な祭の行列が続くのが上野天神祭である。

まず先頭を行くのがおそらく日本一と思われる大御幣だ。「ごへいかつぎ」というえんぎやを諧謔した日本語があるが、御幣とは紙や布を切って木に挟んで下げた清め・払いの神道真髄の役割を果たす神具であるが、高さは１０メートル余あろう５人でかついだその大「御幣担ぎ」にこの祭の遊び心を観た。そのあとにつづくのが鬼行列だ。藩主藤堂高虎が病気平癒を祈願して寄進した能面が始まりと言われるが、悪鬼・四天・役行者・八天鬼・ひょろつき鬼・鎮西八郎為朝等々まさに百鬼夜行の鬼行列が沿道の老若男女を沸かせて延々と練っていく。

そのあとから９町内のしるしとだんじりが続く。しるしというのは神の祭壇であり、祭壇の尻につくからだんじりと言う。だんじりは京都祇園祭の山・鉾を連想させ、水引幕・彫り物・錺金具（かざりかなぐ）などの懸想品は文化的レベルが高く、だんじりで演じられるお囃子は明らかに京文化伝播の翳を色濃く漂わせていた。

ユネスコの無形文化財登録候補になっているこの dramaticな宗教的・民族的・歴史的行列がクライマックスから終末を迎える頃、かみなずきの午後の陽は急速に陰ってきた。

写真：デン真